

説教「祝福を受けたナオミ」

ルツ記 4 章 11～22 節

1997.12.28 年末説教

日本バプテスト同盟 関東学院教会

1997 年最後の主の日を迎えました。先週のクリスマス礼拝や集会、キャロリングを通し、教会が神の家族としてこれに関わり、主の御降誕の恵みを喜び、感謝のうちにこれを終えることが許されました。また、この間に 5 名の方がバプテスマを受け、その方々を教会員としてお迎えできたことも、喜びをさらに大きくしてくれました。今朝も御出席の皆さんの上に、御家族の上に主の限りない平和と喜びがあるよう、主イエスの御名により祝福いたします。

今朝は、ルツ記の 4 章後半を中心に取り上げます。ここは物語全体のエピローグの場面であります。4 章の前半はこの物語のクライマックスとも言うべきところです。まずは、このクライマックスに至るまでのあらましを語る必要があります。

要約して申しますと、落穂拾いに出かけたルツが背負いきれないほどの麦を運んで帰りました。それは、ルツが偶然にもナオミの親戚の一人であるボアズという資産家の畑に行ったからであります。その畑で落ち穂を拾わせてもらったこと、またそこで大変な好意を示され、収穫が終わるまで他所の畑に行かずずっとボアズの畑で落ち穂を拾いなさいと言ってくれたことを ナオミは知って、神をほめ讃えるのです。

そして 3 章において、大麦刈りの終わりに 収穫された麦が山のように積まれたとき、ボアズが一夜をその畑で過ごすことを知って、ナオミはルツに美しい装いをさせ、香油を塗って、ひそかにボアズの寝ている側に行かせます。

ボアズは夜半に 誰か側に寝ている女性を見て驚くのですが、ルツはそういうかたちでボアズに求婚するのです。ルツは 3 章 9 節で「あなたは家を絶やさぬ責任のある方です」と言います。つまり、ナオミの家系が絶えてしまわないように、ナオミの息子の嫁であったルツと結婚して 子孫を残してほしいと申し出たわけです。レビラート婚と呼ばれる制度で、家系が絶えないようにするためです (参照 申命記 25 : 5～10。家名の存続)。

このルツ記の劇的な物語の中で読者を緊張させる場面が 2 つあります。

一つは、真夜中に畑の収穫物の側で寝ている男性の所へ女性が化粧をしていって添い寝をしたらどうなるだろうか、ということです。ですが ボアズは、若い男に興味を示さず、自分の畑で落ち穂を拾い続けたルツの真心、誠実、真実な愛に感心し、この時の会話でルツを祝福して言います。「心配しないでよい。あなたが立派な婦人であることは、村の誰もが知っている。わたしは家を絶やさぬ責任がある。その責任を果たしましょう。しかし、もう一人、わたしよりも先に責任を果たす人がいるから、明日 その人と話をつけよう」と約束するのです(3:10～13)。そして、ルツは明け方まで一緒にいて、朝早く 穀物を与えられ、帰っていきます。

あと一つの緊張する場面は 4 章の前半で、町の門の所に町の長老たちが集まる、いわば法廷での場面です。ボアズがそこで待っていると、例の男が現われます。ボアズは「未亡人となったナオミが畑を売らねばならない。それを買い取ってやる責任を果たすのはあなたですが、どうしますか」と、法廷で問います。すると、その人は「わたしがその責任を果たしましょう」と答えたのです。

あわやルツとボアズが結婚する望みは絶たれたのかと 読者は気をもむのですが、すぐその後で、ボアズがまた言います。「ナオミの手から畑地を買い取る時は ナオミの息子の妻であるモアブの婦人のルツも引き取って家名を継がせる責任がありますが、それも引き受けますか」と問う。すると、その人は「いや、そこまで責任を負うことはできません。わたしはその責任を下ります」と答えたのです。

そこで、ボアズは「それなら、わたしがその責任を果たしましょう」と言って、門の所にいる長老たちの証人の前で、「ルツと結婚して、故人の名と^{しぎょう}嗣業を再興させる責任を果たします」と宣言しました(4:10)。これによって、ボアズのこの決断は法的に成立するのです。ルツ記を読む者にとって、ルツは危うく別の男と結婚することになるのか、緊張させられる場面がここです。こうして、劇は最後のエピローグを迎えたのであります。

4 章 11 節以下ですが、町の門の所にいた長老たちはボアズを祝福します。あなたが迎え入れる婦人によって 子宝が与えられ、家庭が恵みを与えられるように、と。こうして、ボアズはルツをめとったのです。

ここで、13 節に「主が彼女を身ごもらせたので、ルツは男の子を産んだ」とありますが、「主が身ごもらせる」というその言葉に注目したいのです。

ルツ記全体を振り返ってみるとき、ルツ記の主人公は誰なのだろうかと思わされないでしょうか。たしかに、ルツ記という表題が付いていますから、ルツが主人公だと言えます。しかし この物語は、夫を失い、さらに二人の息子まで次々と失ってしまった、悲しみと失望のどん底に沈んだナオミが主人公だとも言えます。さらには、ルツと結婚して ナオミの家名を再興したボアズも重要な役割を演

じています。誰が主人公なのか、一人に絞り込むのは難しいのが実際です。

しかも、この劇にはもう一人、舞台の背後に陰の主人公がいるのに気がつきます。それは、主です。神です。1章6節に「主がその民を顧み、食べ物をお与えになった」とあります。つまり、ベツレヘムの飢饉を主が終わらせたので、ナオミは故郷のベツレヘムに帰る決心をしたのでした。そして今、4章13節。主がルツを身ごもらせたので、ルツは男の子を産んだのです。14節では、女たちがナオミを祝福して言っている言葉の中で「主はあなたを見捨てることなく、家を絶やさぬ責任のある人をお与えになった」と言われています。このように、この物語は、それが終曲に向かって進むのを目に見えないところで背後において導いておられるお方がおられるのをはっきりと語っているのです。

さて、ルツはボアズに男の子を出産しました。この物語は終曲において、ナオミに注目しています。つい先頃、モアブからベツレヘムに ナオミが帰ってきたとき、ナオミを見つけて、町の女たちが騒ぎました。ナオミは悲しみの中で、「わたしをナオミ、ナオミと呼ばないで、マラと呼んでください。わたしは今、悲しみのどん底にあるのです。辛いのです」と言った。それが今や、女たちはナオミに向かって こう言うのです。14節「主をたたえよ。主はあなたを見捨てることなく、ナオミを子のないやもめで終わらせず、家を絶やさぬように ボアズという人をお与えになった」。これは、ナオミが夫と息子たちをすべて失ったあの時と比べると、まさに雲泥の差、天と地の違いであります。

そして、家名を継ぐべき子どもが今、与えられました。「イスラエルの中で、その子の名があげられるように」(14b)。ナオミが失った悲しみは今や、拭い去られ、喜びに変えられたのであります。

15節では、ルツに生まれた男の子が「あなたの魂を生き返らせる者となり、老後の支えとなるでしょう」と言っています。また、ルツのことに一言、触れています。「あなたを愛する嫁、七人の息子にもまさる あの嫁」と言っていますが、ルツに対するこれ以上の称賛の言葉はありません。このようにして、不幸だったナオミは今や、その何倍にも勝る幸せを、祝福を受ける者となったのです。

さて最後に、16節に興味深いことが記してあります。ナオミがその乳飲み子を懐ふところに（「膝の上に」と言ってもよい）抱き上げたのです（参考 養子の儀式）。そして、養い育てたとあります。

また、17節を見ると、近所の婦人たちは「ナオミに子供が生まれた」と言った。子どもを産んだのはナオミではなくルツであったのに、どうして ナオミに子どもが生まれたと言ったのでしょうか。

ナオミは主人を失い、息子も失ってしまいました。もはや、自分のお腹なかから子どもが生まれることのない年になっていました。だからこそ、モアブを引き上げるとき、二人の嫁を説得しようと繰り返し「あなた方と結婚できる男の子を私に期待しても、それは全く不可能です。だから、モアブの自分の国に帰って、幸せになってほしい」と言ったわけです。

そのナオミに、子どもが生まれるはずがないのです。にもかかわらず、ここで婦人たちは「ナオミ

に子供が生まれた」と言った。ですから、ナオミが膝の上に 孫である男の子を抱き上げて育てたというのは、ナオミの養子にしたということです。このようなかたちで、神は悲嘆のどん底にあったナオミに子をお与えになったのでした。それは、神のなざる奇跡ではありませんか。

そして、その子をオベドと名付けました。このオベドの子がエッサイであり、エッサイの子はあの有名なダビデ王です。すべてを失ったナオミに男の子が授けられただけでなく、その子はダビデ王の祖父となったのです。女たちがルツに生まれた男の子を見て、「イスラエルでその子の名があげられるように」(4:14) と言ったその言葉がここでも実現しているのです。

この終曲の場面でナオミ自身が何か神に向かって感謝し、讚美を歌ったといったことは、ルツ記には一言も記されていません。ただ、これを読む私たちが、この女主人公がどんなにか幸せであり、祝福に満ちた生涯をおくったか、それを想像することができるだけです。

これは劇であり、最後の場面はそのようにして、近所の婦人たちがルツを称賛し、ナオミを祝福しているところで幕となります。しかも、婦人たちの祝福の言葉はそのまま、見えざる神の素晴らしい奇跡の御業をほめ讃える言葉で終わってもいます。それは、ルツ記の素晴らしい終わり方です。

ルツ記は一人一人の人生を画いていきます。どんなに苦しい時、困難な時にあっても、どんなに悲嘆にくれるようなことが起きても、神をあがめ、真実と愛に生きるとき、主は必ず その不幸な運命を喜びと賛美に変えてくださるということを語ってくれています。

もう一つ 付け加えるならば、モアブのルツが、つまりイスラエルにとって異邦人の 外国人出身の娘がナオミに向かって「あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神」と信仰告白をした。しかも その時から、そのルツがその後のイスラエルにとって決定的な役割を果たすことになったということです。

マタイ福音書の 1 章の系図に、ボアズはルツによってオベドをもうけ、ダビデの祖父となり、さらにイエス・キリストをこの世に誕生させる先祖の一人に加えられたという事実が記されています。

イエス・キリストを信じて受け入れ、教会の一員として真実に生きることによって、私たちもまた、ルツやナオミのように祝福された人生を生き、さらに神の国の歴史に残る大切な役割を担うことになるということを、このルツ記から教えられるのであります。

この年を主と共に、そして皆さんと共に 礼拝を通して主に使え、人に仕えることができたことを感謝し、新しい年に向かって、さらに大きな望みをもって進んでいきたいものです。